

今月のメッセージ (2012年12月)

日本銀行富山事務所長
佐子 裕厚

ルイスの転換点

先日、若き社会学者の古市憲寿先生¹の講演会に参加し、戦前から現在までの若者の就職事情の変遷といったお話を聞きました。

先生のお話では、戦前は「雇われないで働くこと」が当たり前で、農業に就職する若者が多かった、1950年代から高度成長期にかけて就職構造が大きく変わり、多くの若者が都会のサラリーマンを目指した、平成になった頃からは、サービス産業化が進んで若者の就職も多様化し、フリーターをしながら夢を追うことも可能になった、ということです。

最近の経済学では、こうした就職動向の変化と経済成長との関係についての研究が進んでいます。一つの例は「ルイスの転換点」というもので、ノーベル経済学者アーサー・ルイス(英国人)の仮説に基づいています。

ルイスの説は、工業化が本格化する前の社会では、農業に多くの労働者が従事しているが(日本の例で言えば戦前)、工業化が本格化すると農業から工業に労働者が移っていき(戦後から高度成長期=集団就職世代)、農業から工業への移転が限界に達すると、工業部門での労働不足が急速に強まるため、経済成長力が大きく低下する(高度成長期の終焉)、というものです。

この「農業から工業への労働者の移転が限界に達したとき」を研究者の名前を冠して「ルイスの転換点」と呼び、ルイスは経済が高成長から低成長に移行する転換点になると考えています。ちなみに、青森発上野行きの集団就職列車が廃止されたのは1975年で、日本の高度成長期の終焉期と重なっています。

中国経済についても、「ルイスの転換点」に関する議論が行われています。中国の高成長を支えていたのは「農民工」と呼ばれる農村部からの出稼ぎ労働者ですが、「農民工」の供給がどこまで増やせるのかが検討のポイントです。

エコノミストの中には、2~3年先には、中国経済が「ルイスの転換点」に達すると主張する人もいます。中国経済の減速は一過性のものではなく、中長期的な節目を迎えたのかもしれない。

以 上

¹古市先生の著書には、「絶望の国の幸福な若者たち」(講談社)などがあります。